

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の 叙述所有構造

大 角 翠

1. はじめに

オーストラリアから 1500km 北東に位置するニューカレドニアでは約 1 万 9 千 mi^2 程の面積に 28 のオーストロネシア系言語と 1 つのクレオール語が話されている。人口約 27 万人(2014 年)のうち現地語の話者数は 6~7 万人程度と見られるが、これらの言語の半分以上は 1000 人以下の話者しか持たない。1853 年にフランスに併合されて以来、フランス語が行政、教育などに使用され全住民の共通語の役割を果たしてきたため、現地語は急速に衰退し、またフランス語の影響による言語変化もおきている。話者の高齢化が進み、家庭内でもフランス語が中心となってきた。

ニューカレドニアの先住民語、ティンリン語⁽¹⁾とネク語はそれぞれ 200 人~250 人ほどの話者しか残らない消滅の危機に瀕した言語である。ティンリン語は主に本島南部のプティクリ及びグランクリ部落、ネク語は本島中部のワウエ及びモメア部落で話されている。両言語とも筆者が調査を行うまで文法が記述されたことは無かった。言語の調査をしているとそこに我々の全く想像し得ないような人類の知恵や発想、世界観が垣間見える時がある。特に何千年もの間、外界と遮断されていたような少数言語には、よく知られた大言語にはない複雑な文法の仕組みや現象が見られるのだが、それらの、一見奇異な現象もまた、人間が持つ認知能力や、コミュニケーション上の戦略を知る上の大きな手掛かりとなる。

本論文ではこの 2 つの言語に見られる存在文と所有文の構造を実例の分析から明らかにし、存在と所有の関係性、両言語の構造的類似性や形態・意味的な対応、更に非対称的な機能と意味の発達について考察を行う。

2. ティンリン語、ネク語の基本構造

ティンリン語、ネク語の動詞文の基本語順は VOS である。動詞には主格代名詞が必ず先行するが、この代名詞は S、すなわち主語の人称、数と一致するものだ。主語と目的語の語順は入れ替えることができるが、ティンリン語(T)では主語の前には、*nrâ* という主語標識(SM)が現れるため主語を特定できる。ネク語(N)にも同様の機能を持つ *na* がある

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の叙述所有構造

が省略することができる。主格代名詞と動詞の間には時制、相を表わすマーカーや動詞修飾語が入り、また、動詞の後には別のタイプの動詞修飾語や副詞が入ることができる。副詞には文頭や文末に置かれるものもある。名詞は文脈の中でトピック化されると文頭に移動する(例2)。

- (1) rri ta pù⁽²⁾ nrâ mē-bêêrrî (T)
3 複⁽³⁾ 叩く 蝙蝠 SM 複-年長者
「年長者たちが蝙蝠を狩った」

- (2) mē-bêêrrî rri ta pù (T)
複-年長者 3 複 叩く 蝙蝠
「年長者たちは蝙蝠を狩った」

一方、両言語には be 動詞に当たる繫辞はなく、いわゆる名詞文は2つの名詞句を並べたもので、動詞文に現れた主語標識の *nrâ* や *na* も必要ない。語順は次の文のようにトピックが先行することが多い。

- (3) farrî-nrî kiki (T)
名前-3 単 キキ
「彼の名前はキキです」

- (4) ne-de?kê awâ (N)
名前-1 方 アワン
「一方の名前はアワン(鳩の一種)です」

「きれい」、「軽い」、「大きい」など、日本語で形容詞として現れるような語は動詞と全く同じふるまいをするので動詞に分類される。例えば(5)では *mùrrù* 「小さい」には主格代名詞が先行している。

- (5) nrâ mùrrù nrâ kiki (T)
3 単 小さい 主語 キキ
「キキは小さい」

3. 存 在 文

存在文は一般に場所表現を伴わないタイプ:「X がある(存在する)」と、場所表現を伴うタイプ:「～に X がある／いる」がある。ティンリン語、ネク語がそれぞれのタイプをどのように表現しているかを見てみよう。

3.1. ティンリン語の存在文

ティンリン語の存在文は *fwi* という存在動詞を用いて作られる。

- (6) nrâ fwi nrâ traiki
 3 単 存在する SM 犬
 「犬がいる(存在する)」

動詞に先行する主格代名詞は上述したように主語の人称、数と一致するのが普通だが、*fwi* を述語とする構文では主語の単、双、複数に関わらず、(7)のように主格代名詞は常に 3 人称単数形の *nrâ* となる⁽⁴⁾。

- (7) nrâ fwi nrâ pù a bwê
 3 単 存在する SM 蝙蝠 ATTR 多い
 「多くの蝙蝠がいる(存在する)」

これらの存在文には場所表現(下の文では *ânramwâ*)を加えることができる。場所表現は文を修飾しており、文の末尾ないしは文頭に置かれ、後で述べる所在文のように動詞の直後に置くことはできない。

- (8) nrâ fwi nrâ traiki ânramwâ
 3 単 存在する SM 犬 あそこ
 「犬があそこにいる(存在する)」

存在文をまとめると次のように示される。

(9) 「(～ に)Xがある／いる(存在する)」

nrâ	fwi	nrâ	NP	(L)
3 単	ある／いる	SM	主語	(場所)

不在は(10)のように、*trarrî*を用いて表わされる。この場合、主語標識の *nrâ* は現れない。このことから文頭の *nrâ* は主格代名詞、*trarrî* は「～を欠く」という意味の他動詞、*suka*「砂糖」は目的語だと解釈することができるだろう。

- (10) nrâ trarrî suka
 3 単 不在 砂糖
 「砂糖が無い(lit. 砂糖を欠く)」

さて、ティンリン語には *fwi* を用いた構文に意味的に類似した文がある。例文(11)を見てみよう。

- (11) rri truu nrî-troo nrâ pù a bwê
 3 複 いる 地面 SM 蝙蝠 ATTR 多い
 「多くの蝙蝠が地面の上にいる」

前述の存在文と異なり、(11)では、動詞に *fwi* ではなく *truu* を用いており、動詞に先行する主格代名詞は一般の動詞の場合と同様に主語の人称、数と一致している。つまり、後置する主語(蝙蝠)が3人称複数なので、主格代名詞は *rri*(3人称複数)が選ばれている。また、この構文では主語がすでに存在すると仮定した上でその所在について述べており、場所表現(例文(11)では *nrî-troo*)は必ず明示される。場所表現を伴わない(12)は非文となる。

- (12) *rri truu nrâ pù a bwê
 3 複 いる SM 蝙蝠 ATTR 多い

更に場所表現の現れる場所も、*fwi* 構文では主語より後(例 8)や文頭であるのに対し、*truu* 構文では例(11)のように動詞のすぐ後、主語より前に置かれる。このことから、存在文では、「Xが存在する」という文に場所表現が文副詞的に修飾しており、一方、*truu*

構文では、場所表現は動詞を限定的に修飾し、「Xは～にある／いる／留まっている」を表わす所在文であることが分かる。

3.2. ネク語の存在文

ネク語はティンリン語の話されている地域のすぐ北側に隣接しており両言語には類似している点も見られるが、逆に統語、形態的に異なる特徴もある。ネク語は(13)のように、*ui*を用いて存在を表わす。動詞に先行する主格代名詞はティンリン語の構文と同様に、後置された主語の数に関わらず常に3人称単数形*è*である。ネク語にもティンリン語の主語標識にあたる *na* があるがしばしば省略される。また、*ui*の前には(14)のように、*tò*「いる、留まる」が入る場合が多い。

- (13) *è ui ra ne?ò*
 3 単 存在する 1 森
 「森がある(存在する)」

- (14) *è (tò) ui (na) kaniâ ?ò*
 3 単 いる 存在する SM たくさん 人
 「たくさんの人がいる(存在する)」

不在はティンリン語の *trarrî* に当たる *pò* が用いられる。

- (15) *è pò jika*
 3 単 不在 煙草
 「煙草は無い」

ネク語にも「所在」を表す *tò* があり、そのすぐ後に場所を示す表現が続く。*Tò* が使われる場合、主格代名詞は主語の NP と人称・数で一致しなければならない。例えば、(14)では主格代名詞は *è* 「3 人称単数」であったのに対し、(16)では *i* 「3 人称複数」が用いられている。また、場所表現はティンリン語の場合と同様、存在文では主語より後、あるいは文頭に置かれ、所在文では動詞に後続する。

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の叙述所有構造

- (16) i tò mwâ kaniâ ?ò
3 複 いる 家 たくさん 人
「たくさんの人が家にいる」

- (17) è tò na nanu âwea
3 単 いる ここ ナヌ 昨日
「ナヌは昨日、ここにいた」

4. 所 有 文

「X は Y を持っている」という叙述所有構造は、ティンリン語、ネク語の両言語とも Stassen (2009)⁽⁵⁾ の分類に従うとトピックシフトのタイプに入り、基本的に存在文から作られる。ネク語には更に、近年発達してきたと思われる所有動詞 *tòpè* を用いた分離可能所有文が観察された。

4.1. ティンリン語の所有文

- (18) toni nrâ fwi nrâ rroto nrâ nrî
トニー 3 単 存在する SM 車 の 3 単. 属
「トニーは車を持っている (lit. トニーは彼の車が存在する)」

(18) は所有文であるが、通常の語順(例 1)と異なり、主格代名詞 *nrâ* の前に「トニー」が置かれている。しかし「トニー」は動詞 *fwi* の主語ではない。つまり、主語がトピック化して文頭に置かれた(2)のような構文とは異なる。(18)の元となっている文は(19)であり、「トニー」は「車」を修飾している前置詞句内の名詞(所有者)である。(19)の「トニー」に前置する *nrâ* は 3 人称単数主格形や主語標識の *nrâ* と形は同じだが、所有「の、of」を表わす前置詞である。

- (19) nrâ fwi nrâ rroto nrâ toni
3 単 存在する SM 車 の トニー
「トニーの車 がある(存在する)」

もう一度(18)を見てみると、「車」を修飾する限定所有の位置にあった名詞が文頭に移動しトピックとなっており、更に、移動した跡には所有者の人称・数に呼応した属格人称代名詞 *nrî* が現れている。この移動の流れは(20)のように表わすことができる(代は代名

詞)。

(20) *sV nrâ NP₂ PREP NP₁*

↓

NP ₁	<i>s</i>	V	<i>nrâ</i>	NP ₂	PREP	PRO ₁
所有者	主.代	存在する	SM	所有物	の	属.代

所有文が存在動詞を用いて作られることは日本語に類似している。(21)では、ティンリン語の(18)と同様に所有物(生物も含む)が存在動詞「いる」の主語の位置に現れ、所有者はトピックとして文頭に來ている。ただし、所有物には属格人称代名詞は付かない。また、日本語においてはこの構文は基本的には親族用語、身体用語、属性を表わすものなどを所有の対象とする分離不可能所有に用いられる⁽⁶⁾。(22)は主語が分離可能所有物(「バッグ」)であるため非文となる。

(21) 良子 は 兄 が いる
 良子 トピック 兄 主格 いる(存在する)
 「良子は兄がいる」

(22) *良子 は バッグ が ある
 良子 トピック バッグ 主格 ある(存在する)

上記のように分離可能なものが所有の対象となる場合は日本語では「持つ」が通常用いられる(「良子はバッグを持っている」)。

4.2. ネク語の所有文

4.2.1. *ui* 所有文

ネク語でもティンリン語と同様に、(*tô*)*ui* を用いた存在文から叙述所有を表わすことができる。基本的構造は(20)と同じである。

(23)

NP ₁	<i>s</i>	(<i>tô</i>)	V	(<i>nâ</i>)	NP ₂	PREP	PRO ₁
所有者	主.代	いる	存在する	SM	所有物	の	属.代

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の叙述所有構造

(24)は通常が存在文であるが、「ジャン」は「兄」を修飾する前置詞句内にある。

- (24) è (tò) ui pè?ari ghi djan
3 単 いる 存在する 兄 の ジャン
「ジャンの兄がいる(存在する)」

(25)では「兄」を修飾する前置詞句の中にあった「ジャン」がトピック化し文頭に来ることによって叙述所有の意味を生み出している。

- (25) djan è (tò) ui pè?ari ghi è
ジャン 3 単 いる 存在する 兄 の 3 単.属
「ジャンは兄がいる(lit. ジャンは、彼の兄が存在する)」

(25)では、「ジャン」のあった場所にè「彼／彼女」が挿入されていることが分かる。

(26)では、?òamwî-「頭」が身体用語であり分離不可能所有に現れる拘束名詞であるため、所有者に当たるè「3 単.属」は前置詞 ghi の後ではなく直接 ?òamwî- に接辞付加する。

- (26) djan è tò ui ?òamwî-è a wèja
ジャン 3 単 いる 存在する 頭-3 単.属 ATTR 良い
「ジャンはいい頭をしている(持っている)(lit. ジャンは、彼の良い頭が存在する)」

4.2.2. tòpè 所有文

ネク語には叙述所有を表すのにもう1つの構文がある。次の例文を見てみよう。

- (27) gò tòpè nepârrâ
1 単 持つ ヤム芋畑
「私はヤム芋畑を持っている」

- (28) è tòpè mwane a kaniâ (na) djan
3 単 持つ 金 ATTR たくさん SM ジャン
「ジャンはたくさんのお金を持っている」

明らかに(27)、(28)は(25)、(26)のような存在文を基にした構造とは異なる。(28)では「ジャン」は *na* の後に置かれていることから分かるようにこの文の主語である。(28)の主語をトピック化して文頭に置いた文が(29)である。

- (29) djan è tòpè mwane a kaniâ
 ジャン 3単 持つ 金 ATTR たくさん
 「ジャンはたくさんのお金を持っている」

「ジャン」は *mwane* 「金」の所有者であるという点では(25)、(26)の文に現れる「ジャン」と同じだが、文法的な役割は異なる。*ui* を用いた構文では所有物を修飾する名詞であったのに対し、(28)では *tòpè* 「持つ」の主語の位置にあり、所有物は動詞に後置する目的語となっている。つまり、*tòpè* は他動詞であり、*have* のような所有動詞の役割を果たしていると考えられる。更に、所有物は代名詞の属格を伴うこともない。

Tòpè を用いた所有の否定文は存在の否定(15)と同様、(30)のように *pò* 「不在」を用いて表される。

- (30) è pò mwane i nya
 3単 無い 金 の 2単
 「あなたはお金を持っていない(lit. あなたのお金は無い)」

Tòpè は「いる、留まる」を表わす *tò* と、*pèghi* 「取る」の短縮形 *pè* が結びついたものと考えられる。*Pè* は「取る」、「付帯する」という意味の動詞としての機能に加え、「～と(共格、具格)」を表わす前置詞としての機能も持つことから、「取る」>「持つ」と発達したのではないか。「～と共にある(*be with*)」という形式が所有文としてよく見られる構造であることを考えると、*tòpè* がそこから所有動詞として発達したとすると不自然ではない。ただ、オセアニア諸語でこのような所有動詞を持つものは Stassen (2009) では報告されていない。

Tòpè を用いた所有文の基本構造は次のようになる。存在文の主語が常に3人称単数の *è* であったのに対し、*tòpè* は所有者の人称、数と一致したものとなる。

- | | | | | | |
|------|------------------|-------------|-----------------|---------------|-----------------|
| (31) | PRO ₁ | <i>tòpè</i> | NP ₂ | (<i>nā</i>) | NP ₁ |
| | 主格 | 持つ | 所有物 | SM | 所有者 |

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の叙述所有構造

この構造は(29)で見たように、後置された NP₁が文頭に移動することも可能である。その場合、主語がトピック化された他の構文と同様、主語標識の *nâ* は現れない。

(32)

NP ₁	PRO ₁	<i>tôpè</i>	NP ₂
所有者	主格	持つ	所有物

5. ティンリン語、ネク語の所有構造の比較

前節で見たようにティンリン語、ネク語の間には非常に類似した言語構造が存在するが、一方で大きく異なる特徴を持つ。先ず、両言語で用いられる形態素の性質を明らかにし、その対応関係を探り、次にネク語の2つの所有文を分析し、分離可能、分離不可能所有との関係を考察する。

5.1. 形態素間の関係

ティンリン語とネク語の存在文、所在文で用いられた形態素は以下のものである(3.1 及び 3.2 参照)。

表 1. 存在、所在動詞

	存在	所在
ティンリン語	<i>fwi</i>	<i>truu</i>
ネク語	<i>ui</i>	<i>tò</i>

表 1 から、ティンリン語の *fwi* はネク語の *ui* に対応し、ティンリン語の *truu* はネク語の *tò* に対応していることが推測されるが、ティンリン語の *fwi* の機能はネク語の *ui* とはかなり異なっている。*fwi* は存在動詞としてだけではなく、何らかの行為を「行う」、何かを「作る」という意味を指す他動詞としても用いられ、更には複合動詞の一部となったりもする、非常に意味範囲の広い動詞なのである(Osumi 2012)。次の(33)、(34)では「する」、(35)では「作る」の意味で使われている。

- (33) nrâ fwi wa peci mwâ
 3 単 する その 本 その
 「彼女はその本を書いた⁽⁷⁾(lit. した)」

- (34) ne nrâ fwi (=nrâ fwi ne)
 何 3 単 する
 「彼は何をしたんだ?」

- (35) nrâ fwi saa droro mwâ nrâ toni
 3 単 作る 1 大きい 家 SM トニー
 「トニーは1軒の大きい家を建てた」

(34)では「する」の目的語である *ne*「何」がトピック化されて文頭に移動しているが、*nrâ fwi ne?*(3 単、する、何)の語順で言うこともできる。この文は(36)のような異なる解釈も可能である。(36)では、*ne*「何」は主語であり、通常の動詞の後の位置からトピック化されて文頭に移動している。SM の *nrâ* は主語が移動すると消えるので(34)と全く同じ文になる。このように、(34)と(36)の解釈は曖昧であるが、通常はコンテキストなどから判断される。

- (36) ne nrâ fwi (=nrâ fwi nrâ ne)
 何 3 単 存在する
 「何があるの?」

Fwi は上記の意味のほかに、時間が一定期間に「達する」、という意味も持つ。フランス語の *faire*「する、作る」の用法に類似している(i.e. *ça fait deux ans*「2 年が経過した」)。(37)で、*aurru fwotra*「2 年」は *nrâ* に先行されておらず、*fwi* の目的語として表れている。

- (37) nrâ fwi aurru fwotra
 3 単 達する 2 年
 「2 年が経過した」

「X が存在する」という意味の *nrâ fwi nrâ X* は「～なので、～の為に」という原因・理由を表わす従属節を導く連結辞としてもよく用いられる。元の意味である「X が存在する」がもう1つの節と結びついて、「X があるので」「X のために」という意味に発展したのだろう。X が「雨」の場合、「雨の為に、雨のせいで」という意味になる(38)。X に補文標識(*mwâ* や *wa drae rra*)が入り、節が続くと「～が～であるので」という意味にな

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の叙述所有構造

る(39、40)。

- (38) ri see fi pwere numea nrâ fwi nrâ wie
 1 複.含 否定 行く へ ヌメア 3 単 存在する SM 雨
 「私たちは雨のためにヌメアへ行かなかった」

- (39) nrâ drarrî nrâ toni nrâ fwi nrâ mwâ
 3 単 泣く SM トニー 3 単 存在する SM 補

 nrâ vajû⁽⁸⁾ nrâ audrê-nrî
 3 単 病気だ／死んだ SM 父-3 単
 「トニーは父親が死んだので泣いた」

- (40) nrâ see dù bee nyôrrô ri nrâ fwi
 3 単 否定 十分 補 料理する 1 複.含 3 単 存在する

 nrâ wa drae rra nrâ trarrî arròò
 SM その こと その 3 単 不在 水
 「私たちは水が無いので料理ができない(lit. 水が無いということのために、私たちが料理することは十分ではない)」

Fwi が上述のように多くの意味を表わすのに対し、ネク語の *ui* は「存在する」という意味しかなく、「する」、「作る」、「達する」は別の動詞 *âmwî* で表わされる。(41)と(42)では *âmwî* は「する」、(43)では「作る」、(44)では「～に達する」の意味となっている。

- (41) gò âmwî pera
 1 単 する 祈り
 「私は祈った(lit. 私は祈りをした)」

- (42) è âmwî djie
 3 単 する 何
 「彼は何をした？」

- (43) è âmwî mwâ toni
 3 単 作る 家 トニー
 「トニーは家を建てた」

- (44) è jè âmwî wai kêvè nedoa
 3 単 未来 達する 既に 5 年
 「もう 5 年になろうとしている」

ネク語の *âmwî* は「存在する」という意味は持たないのにもかかわらず、*è âmwî na X* あるいは *è âmwî mè* (*mè* は補文標識) を用いてティンリン語の *nrâ fwi nrâ X* 「～の為に」と同様の意味を付与することができる。(45) では名詞が、(46) では補文が続いている。

- (45) è âmwî na ?ui è di nedjerri
 3 単 する SM 雨 3 単 濡れる 土地
 「雨のため土が濡れている」

- (46) bu ta ve na virradji è âmwî mè
 1 双. 除 否定 行く へ 村 3 単 する 補
 ?ui ghi è
 雨が降る の 3 単. 属
 「私たち二人は雨が降ったので村へ行かなかった (lit. 私たち二人は、雨が降ったと
 いうことが起きたので村へ行かなかった)」

ティンリン語の *fwi*、ネク語の *ui* と *âmwî* のそれぞれが表わす意味の範囲を表 2 で示す。*Fwi* の意味のうち、「存在する、所有する」が *ui* の意味に対応し、残りの意味が *âmwî* に対応して相補分布をなしていることが見てとれる。このことから、ティンリン語の *fwi* の方が古く、ネク語で二つの形態素に分かれたのではないかと推定することもできよう。

表 2. *fwi*、*ui*、*âmwî* の表わす意味

	する	作る	達する	存在する	所有する	～なので 為に
<i>fwi</i>	○	○	○	○	○	○
<i>ui</i>	—	—	—	○	○	—
<i>âmwî</i>	○	○	○	—	—	○

5.2. 分離可能所有、分離不可能所有と所有構造

ティンリン語、ネク語の名詞には拘束形と自由形がある。拘束形は単独では現れないもので、常に所有者接辞をとる：[X(所有物)－Y(所有者)]。例外的に所有者と結びつかない場合もあるがその場合は他の形態素と結合し複合語を作る。

拘束形の名詞には身体用語、属性、親族名称、位置関係、生活上不可欠なものなどの一部、及び所有分類辞⁽⁹⁾が含まれる。所有者接辞は人間だけでなく、部分に対する全体や、位置関係の基準点を表わすこともある。この種の所有は、いわゆる分離不可能所有(直接所有)と呼ばれる。一方、自由形の名詞は上記以外の物を指し、分離可能所有(間接所有)に現れる。以下に拘束形、自由形の名詞の例を挙げる。

ティンリン語 <拘束形>

ôrrôme-nrî 「彼の目」 *bê-nrî* 「彼の腕、手」
farrî-nrî 「彼の名前」 *drô-mwâ* 「家の上／屋根」
nrûjû-nrî 「彼の娘」 *wô-nrî* 「その実」

<自由形>

wake nrâ nrû 「あなたの仕事」 *kasi nrâ nrû* 「あなたのバッグ」
peci nrâ toni 「トニーのノート」 *mwâ rrê kevi* 「私たち(除外)の家」
traiki nrâ nrî 「彼の犬」

ネク語 <拘束形>

pimè-ju 「私の目」 *gaue-è* 「彼の腕」
mèba-è 「その羽」 *pèè-è* 「彼の孫」
?ôamwî-nyu 「私の頭」

<自由形>

<i>pè?ari ghi è</i> 「彼の兄」	<i>mèji ghi è</i> 「彼の槍」
<i>ajitè ghi è</i> 「彼の皿」	<i>jake ghi è</i> 「彼のバッグ」
<i>nepârrâ ghi è</i> 「彼のヤム畑」	<i>mwane ghi è</i> 「彼の金」

上記の例に見られるように、「X の Y」という限定所有において、拘束形の名詞には常に所有者を表わす代名詞または名詞が直接、接辞付加される。一方、自由形の名詞は、ティンリン語では所有の前置詞 *nrâ*(一般)、*rrê*(家、船、鍋に対して)、*ò*(火に対して)が、ネク語では前置詞 *ghi~i* が後続し、その後に属格代名詞ないしは名詞が続く。

ここでこの2つのタイプの名詞が叙述所有の対象となった時にどの構造に現れるかを検証しよう。

5.2.1. ティンリン語

4.1.で考察したように、ティンリン語には1つの叙述所有の構造しか見られない。(18)を再掲すると、所有されているものは自由形名詞の「車」であるが、そこに同じく自由形の *kasi* 「バッグ」、*traiki* 「犬」を代入しても問題ない(47、48)。

- (18) *toni* *nrâ* *fwi* *nrâ* *rroto* *nrâ* *nrî*
 トニー 3 単 存在する SM 車 の 3 単.属
 「トニーは車を持っている (lit. トニーは彼の車が存在する)」

- (47) *toni* *nrâ* *fwi* *nrâ* *kasi* *nrâ* *nrî*
 トニー 3 単 存在する SM バッグ の 3 単.属
 「トニーはバッグを持っている (lit. トニーは彼のバッグが存在する)」

- (48) *toni* *nrâ* *fwi* *nrâ* *traiki* *nrâ* *nrî*
 トニー 3 単 存在する SM 犬 の 3 単.属
 「トニーは犬を飼っている (lit. トニーは彼の犬が存在する)」

一方、拘束形の名詞が所有物の場所に現れた場合はどうだろうか。

- (49) *toni* *nrâ* *fwi* *nrâ* *nrùjù-nrî*
 トニー 3 単 存在する SM 娘-3 単.属
 「トニーは娘がいる (lit. トニーは彼の娘が存在する)」

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の叙述所有構造

- (50) ? toni nrâ fwi nrâ ôrrôme-nrî
 トニー 3 単 存在する SM 目-3 単.属
 「トニーは目を持っている (lit. トニーは彼の目が存在する)」

(49)は問題ないが、(50)は不自然である。「頭」、「目」のように人間にとって普通に備わっているものについて、わざわざ「彼は頭／目を持っている」とは言わないからである⁽¹⁰⁾。このような場合、所有物に「大きい、良い」などの修飾語をつけたりするか、あるいは特別な意味を込めたりして使われることが多い⁽¹¹⁾。

以上、ティンリン語は限定所有では名詞の種類により、分離可能所有、分離不可能所有の2つの構造が見られ、更に所有物により多様な形式が現れる(注9参照)にもかかわらず、叙述所有では所有物による区別はなく、全て、存在・トピック構造だけで示されることが分かった。

5.2.2. ネク語

ネク語では4.2.で考察したように2つの叙述所有の構造がある。*Ui* 所有文と *tòpè* 所有文である。*Ui* 所有文で所有物として現れている語は(25)では *pè?ari* 「兄」、(26)では *?òamwî-* 「頭」であるが、*pè?ari* は自由形、*?òamwî-* は拘束形である。(26)の「頭」は普通所有物(注10)だが、修飾語「良い」により可能な文となっている。次の例(51)の *mèba-* 「羽」、(52)の *djuâ-* 「足」は拘束形、(53)の *mèji* 「槍」は自由形である。(51)の「羽がある」という表現は「飛ぶことができる」という意味で使われている。

- (51) kaî è ui mèba-è
 セイケイ鳥 3 単 存在する 羽-3 単.属
 「セイケイ鳥は羽がある」
- (52) karra è ui kênî me rakê djuâ-è
 蜘蛛 3 単 存在する 5 と 1 足-3 単.属
 「蜘蛛は6本の足を持つ」
- (53) toni è ui mèji ghi è
 トニー 3 単 存在する 槍 の 3 単.属
 「トニーは槍を持っている」

これらの例から分かるように、ネク語の *ui* 所有文では、自由形、拘束形の両方の名詞が

現れる。

Tòpè を用いた所有文は 4.2.2. で考察したが、例で用いられた所有物は *nepârrâ* 「ヤム芋畑」、*mwane* 「金」であった。これらは自由形の名詞である。更に別の名詞を当てはめてみると、*ajitè* 「皿」、*jake* 「鞆」や *rarra* 「ナイフ」(54) などとも問題なく使えるが、(55) のように、拘束形の名詞は使えないことが分かった。

- (54) djan è tòpè ra rarra
 ジャン 3 単 持つ 1 ナイフ
 「ジャンは 1 本のナイフを持っている」

- (55) *kaï è tòpè mèba-è
 セイケイ鳥 3 単 持つ 羽-3 単. 属
 「セイケイ鳥は羽を持っている」

Tòpè の用法をさらに詳しく調査すると、「一時的に(手に)持つ」という意味にも使える(例えば(54)では、ジャンがたまたまナイフを手にしたような場合)。また、対象物は *nerre* 「権力」のような抽象的な語もありうる。(56)、(57)のように、同じ語が *ui* と *tòpè* の両方の所有文に現れることもあるが、*ui* 構文に現れた方が後者より分離不可能性が高いことが観察された(Osumi 2012)。

- (56) prezidê è tò ui nerre-è
 大統領 3 単 いる 存在する 権力-3 単. 属
 「大統領は絶対的権力を持っている」

- (57) patrik è tòpè nerre
 パトリック 3 単 持つ 権力
 「パトリックは力(一時的)を持っている」

同様に、*ira* 「子ども」は、親族名称である場合は存在文の構造をとるが、ベビーシッターをしているなど、他人の子どもを預かっているような場合は *tòpè* の構造を用いる。このことも分離可能性の違いを示唆している。

ティンリン語、ネク語(ニューカレドニア)の叙述所有構造

- (58) gèè è tòpè ra ìra
 おばあさん 3 単 持つ 1 子ども
 「おばあさんは子どもの面倒を見ている」

表3は両方の構造に現れる語の例である。自由形しかない *taaki*、*peci*、*jake* は意味の違いはない。

表3. *ui* と *tòpè* の所有文に現れる所有物と意味

	<i>ui</i> 所有文での意味	<i>tòpè</i> 所有文での意味
<i>?ò?è</i>	夫	男
<i>ôwe</i>	妻	女
<i>ira</i>	(親に対する)子ども	(大人に対する)子ども
<i>nerre</i>	権力(絶対的)	権力(一時的)
<i>taaki</i>	犬	犬
<i>peci</i>	ノート	ノート
<i>jake</i>	上着	上着

6. ま と め

ティンリン語の存在動詞である *fwi* は、5.1.で考察したように、「存在する」という意味を超えて「作る、する」という行為までもカバーする多義、両用動詞であるが、隣接するネク語ではこの語に対し、2つの語が対応していることが分かった。「作る、する、達する」の意味は *âmwî* に、「存在する、所有する」の意味は *ui* が担っているのである。世界の言語を見ると、存在動詞が所有表現に用いられることは日本語も含め珍しい現象ではないが、*fwi* の持つ多様な意味がもし同一の源から生まれたものだとすると、またネク語の二つの形態素との関係を見ると、これらの意味同士が無関係なものではなく概念的なつながりを持つと考えてよいだろう。「所在」、「所有」は「存在」が初めにあってなりたつものであり、「作る、する」という行為は「何かを産む」、すなわち「存在を作り出すもの」と見るならば、意味の経路をたどることができる。

所有の構造を見た場合、ティンリン語、ネク語の両言語に分離可能(自由)、分離不可能(拘束)名詞が存在し限定所有でははっきりと区別されているのに対し、叙述所有の構造ではティンリン語には1つの構造、すなわち存在動詞を用いた構造しかない。ネク語には存在動詞を用いた構造に加えて、所有動詞 *tòpè* とその目的語(所有物)を含む構造がある。存在動詞を用いた構造は所有者がトピック化し前置詞句内にアナフォラを残すことや、自

由、拘束のどちらの名詞も起きうという点で両言語は非常に類似しており、その点からも *tòpè* を用いた構文は後から発達したものでだろうと想像できる。*Tòpè* は初めは「所在」を表わす *tò* に「取る、付帯する、と(*with*)」を表わす *pè* が共起したものだったと思われる(4.2.2.)、時を経て、一時的な所有を表わす動詞として再分析されたのではないだろうか。その結果、この構文では分離可能所有の名詞だけが起きることとなった。

ニューカレドニアの言語は文字の歴史が無い、言語の過去の姿を復元することは難しい。本論文でティンリン語の *fwi* の多義性や、*âmwî*, *ui* との対応、ネク語の2つ目の叙述所有表現について論じてきたが、3つの語が同語源から生まれてきたのか、異なる形式や意味の派生の経路はどう説明できるのか、ネク語だけになぜ特殊な所有構文が発達したのかなどの疑問を解くためには、他の近隣の言語の調査を含め更に多くの研究を必要とするだろう。ニューカレドニアの大半の先住民語の話者が高齢化し、若者への言語の継承も十分行われていない中、これらの言語の包括的な調査・研究や記述が緊急に進められることを祈ってやまない。

注

- (1) 本論文のデータはすべて Osumi(1995) 及び 2001 年～2013 年のフィールドワーク(大角)により得られたものである。現地で研究、調査に協力してくださった多くの方々に感謝する。2011 年以降は文部科学省科学研究費助成金(2352052)及び東京女子大学比較文化研究所個人研究助成金(2011～2014)を得た。ここに謝意を表したい。
- (2) 本論文で用いた特殊な文字は次のとおり。音声は [] の中に記した。è [ɛ], ò [ɔ], ù [u], î [y]. î, â, ô, ê はそれぞれ [i], [a], [ɔ], [ɛ] ないしは [e] の鼻音。s [ʃ], gh [ɣ], ? [ʔ], pw [pʷ], fw [fʷ], mw [mʷ], ny [ɲ], c [tʃ], dj [dʒ], tr [tʰ], dr [dʰ], nr [ɳ], rr [ʀ]. t, d, n は歯音。
- (3) 例文で用いられた略号は、主(主格)、属(属格)、単(単数)、双(双数)、複(複数)、包(包含形)、除(除外形)、1・2・3(1 人称、2 人称、3 人称)、補(補文標識)、ATTR(attribute、属性)、NP(名詞句)、PREP(前置詞)、PRO/代(代名詞)、s(主格代名詞)、SM(主語標識)、-(形態素境界)、L(場所、所格)
- (4) この構文に現れる *nrâ* は非人称と考えることができるだろう。ただし、ごくたまに 3 人称複数形の *rrî* が用いられる場合もある。
- (5) Stassen は叙述所有の構造に関して 420 の言語を詳細に分析し、統語的特徴から大きく 4 つのグループに分けた：(a) locational、所格、(b) with、共格、(c) topic、(d) have(所有動詞)。ティンリン語は(c)のトピックの構造の変異形でトピック化に加え所有物に所有者の照応指標がつく(2009: 57, 70-71)。
- (6) 分離不可能所有とは一般に所有される物と所有者が生得的、または緊密な関係にあり、また、所有者の意志でその関係を破棄することができないものとされる。日本語の「X は Y がある／いる」の所有構文は分離不可能なものであっても普通に備わっているもの(例えば目や母)に対しては用いられず、あえて言う場合は(例：「田中さんは目がある」)、特殊なあるいは過度な力を持つときに使われる(大角 2015 を参照)。
- (7) 無標の行為の動詞は通常、過去に起きた事柄を表す。
- (8) *vajù* 「病気だ」は「死んだ」という意味でも使われる。

- (9) 所有分類辞とは拘束形の名詞の1種でそれ自体が所有者を接辞として取る。ティンリン語の場合、所有物の種類と所有の目的によって次の7種類がある。同じ所有物であっても「飲むため」や「植えるため」のように用途が異なると、異なる所有分類辞が選ばれる。

- (1) (食用の)肉(牛肉、鶏肉、卵、ココナツ等)*hwee-*
- (2) (食用の)澱粉(米、ヤム芋、ココナツ等)*e-*
- (3) (食用の)果物(パパイヤ、バナナ、マンゴー等)*ere-*
- (4) (食用の)噛むもの(サトウキビ、ガム等)*hwiie-*
- (5) 飲み物(ジュース、ココナツ、水等)*odho-*
- (6) (植える用の)植物(木、種等)*êê-*
- (7) 慣習的な所有(土地、個人の物等)*hêê-*

食べ物や飲み物などについて「Xさんの(食べる用の)鶏肉」などと言う場合、所有分類辞を伴って表現しなければならない。次の例のように、*meò*「鶏」は *hwee-toni*「トニーの(食べる)肉」の前でも後ろでもよい：*meò hwee-toni*(鶏、食肉-トニー)または、*hwee-toni meò*(食肉-トニー、鶏)「トニーの鶏肉」。

- (10) 角田(2009: 158)は身体用語や属性の中で普通、人に備わっているものを、(a)普通所有物(目、体重、性格など)、誰にでもあるとは限らないものを、(b)非普通所有物(ほくら、にきびなど)と呼んでいる。普通所有物は一般に所有の対象とはなりにくい。
- (11) 日本語で、「一郎は足がある」と言うと、「足が速い」という意味合いが加わる。

参考文献

- Osumi, Midori. 1995. *Tinrin Grammar*. Honolulu: University of Hawai'i Press.
- Osumi, Midori. 2012. The semantic range of the Tinrin verb *fwi*, with reference to some related morphemes in Neku, *Language and Linguistics in Oceania*, vol.4, The Japanese Association for Oceanic Languages, 1-25.
- 大角翠. 2015. ティンリン語と日本語の所有表現、「作る、する、ある」から所有へ、『日本語学』、vol.34-2, 66-77.
- Stassen, Leon. 2009. *Predicative Possession*. Oxford: Oxford University Press.
- 角田太作. 2009. 『世界の言語と日本語—言語類型論から見た日本語』、くろしお出版.

〔東京女子大学名誉教授(言語学) 2011～13年度個人研究員〕